

モロッコ紀行

千葉県八千代市 松尾 昌泰

1. はじめに

今年の海外旅行はアメリカ西部の大自然グランドキャニオン（5月下旬出発）を予定していた。しかし、4月上旬に左足の腓骨を骨折してしまったので、11月に延期し、場所は歩行数の少ないツアーのモロッコに変更した。

モロッコという国は暑い砂漠の国で、大きな近代的な都市はない国だと思っていた。

しかし、少し違った。モロッコは、国土の中央を東西に大きなアトラス山脈が背骨の様に横たわり、モロッコを大きく2分している。その北側にはきれいな近代的な町があり、気温は関東と同程度であった。雨は多くないがそれなりに降り耕作地も広がっている。そして南側には川沿いにオアシスがあり村や耕作地や林があるが、確かにほとんどはカラカラの乾いた砂漠であった。



ツアーで回ったルート

2. モロッコの世界文化遺産とマラケシュの旧市街（メディナ）

モロッコの世界文化遺産は9か所あり、その多くが旧市街であり、今でもその中に多くの人々が所狭しと生活している。

旧市街は頑丈な城壁に囲まれ、入口には大きな門がある。その中に広場や市場があり店や民家がある。通路は昔の儘で狭く、車は勿論は通れず、運搬はロバによる。通路にはロバの落とし物（糞）も所々にあり、店先の野菜や香辛料や吊るされた肉などの匂いが交じり合って、あまり良いものではなかった。

右の写真はマラケシュの旧市街の中心にある「ジャマエルフナ広場」で、屋台が出始めた夕方の風景である。日が暮れるにつれ、どこからとなく人が集まり、いたるところで大道芸が始まり人だかりができ、大変な賑わいになる。



これはモロッコの世界遺産の典型的な旧市街であり、東西2キロメートル、南北3キロメートルの城壁に囲まれており、その中は、迷路のような多くの路地があり、現地のガイド同行でなければ迷うと云われている。

旧市街から抜け出て新市街に行けば、もっと道も広くゆったりと生活できるのに、このような狭い場所に多くの人が寄り添って生活しているのは、人との付き合いとか利便性の為なのだろうか。

3. アトラス山脈越え

モロッコを東西に横切るアトラス山脈は総延長 2400km にもおよぶ。(日本の北海道の端から九州の端まで位の距離だと思う。)

地中海からの湿気を含んだ空気はこの山脈にぶつかり雨や雪になって、大地を潤しモロッコを農業国にしている。

この大きな壁は 3000m~4000m 級の山が連なっており、山脈越えは山の合間をバスに揺られながら、険しくて雄大な景色を体感できた。山脈越えの途中で、山に張り付いたようなベルベル人の村が点在し段々畑もあった。

本格的な山道になり最高地点(標高は 2260m) の峠で一休み、こんな高い所にも土産物の店があった。



4. オアシス

「オアシス」と聞くと、沙漠を旅するキャラバン隊が緑豊かな泉に出会い、そこで一息つく姿を想像する。しかし、モロッコで見たのは、「沙漠に浮かんだコジンマリとした緑のオアシス」ではなく、「河川沿いに長い帯状にできたオアシス」だった。

アトラス山脈の茶褐色の断崖の周辺の谷底が平野になり、背の高い高木のナツメヤシ、中木のオリーブやオレンジなど乾燥に強い木が植えられ、小麦や野菜の畑が広がり、そして住宅群がある。これが緑のオアシスであった。

しかし、場所によっては、地球温暖化の影響の為か、最近降水量の減少により地下水位が低下し枯れてしまいそうなオアシスもあるようだ。

5. トドラ溪谷

アトラス山脈の中にあるトドラ溪谷は観光のスポットとなっており、ここで昼食をとった。両側から赤茶色の崖に挟まれた深い溪谷で、ほぼ垂直に切り立つ赤い岩壁が 200～300m も続いていた。この崖の最高の高さは 160m だそうで、なんとも壮観そのものだった。



6. 砂丘の村、メガズーガ

舗装している道がないため、砂丘への入り口の街エルフードで観光バスから 4WD に乗換え、ガタガタした砂漠約 50 km を 1 時間かけて砂丘の村メルズーガに着いた。

見渡す限り砂漠であるが、アフリカの大きなサハラ砂漠の北端の小さな村に過ぎない。

宿からサンセットをみて、星空の下で夕食をとり、翌朝の砂丘からのサンライズにそなえた。

翌早朝の暗い中を、ベルベル人の案内でラクダに乗ってサンライズがきれいに見える砂丘まで移動した。モロッコならではの壮大な砂丘の風景であった。



(注) 砂漠と砂丘の違い

「砂漠」と言うのは、「降雨量が少なく、それ以上に蒸発量の方が多い土地」の事で、砂地だけではなく、実際は岩石によって構成されている事の方が多い。

「砂丘」と言うのは、風によって砂が運ばれて、丘状の地形になったもの」の事。

7. 城壁などに巣をつくるコウノトリ

野生のコウノトリや巣を幾つか見かけた。市街地の中の城壁や高い電柱の上などに、幾つも巣を作っていた。地上の雑然とした街や車や人々の動きを気にすることなく、コウノトリが街中で普通に暮らしている。野生のコウノトリの食餌となる生物がまだ残っていることの証だと思う。素晴らしいことだと思う。



8. ローマ都市遺跡：ヴォルピリス

モロッコの世界遺産 9 個の中で人が住んでない世界遺産が「古代ローマ遺跡のヴォリビリス」である。1 世紀頃ローマの領地になり繁栄した街で、その保存状態は非常に良い。建物の姿はないが、床のモザイクタイルは鮮明な色彩で保存されている。

公衆トイレの跡、浴場の跡などもはっきり残っている。勿論、写真で見る円柱は、崩壊したものを積み重ねた、一部再現したものである。

床に残されたモザイクタイルに水をかけると、色彩が鮮明の現れてきた。



9. 終わりに

モロッコには教育を受けてない子供たちが沢山いる。学校教育は無料と言うが、点々と散在している小さな村には小学校は作れないし、隣町の学校まで行く交通機関もない。しかし若い人は沢山いる。

一方、アトラス山脈の断層地帯に鉱物資源が集中しており、モロッコは大の資源国である。リン鉱石の採掘量は世界第2位、鉛鉱は同7位、コバルト鉱は同8位である。勿論、銅、亜鉛、金、銀なども採掘している。

農業については、モロッコの大西洋側と地中海側では雨水による農耕ができ、耕地面積は日本の2倍ほどあるそうだ。しかも大西洋の沿岸には良い漁場も広がっている。こう考えると、時間は掛かろうが、モロッコはこれから希望が持てる国のように思われる。

日本に帰国して20日ほど経った頃、テレビ・ニュースをみてびっくりした。

モロッコで大雨が降り続き、南部各地では洪水が発生し、建物や民家、車などが流されて、道路が寸断された、というニュースだった。死者(32人)もあり、観光客200人ほどが立ち往生し、ヘリコプターやチャーター機で救出や救援がなされたとのことであった。

この観光客が立ち往生した場所(ワルザザート)は、ツアーで通った場所であり、若し時期がずれてなかったら大変なことになっている。よかった！

以上